

モンゴル外交私記―北東アジアの中の日本とモンゴル（連載第2回）

元在モンゴル日本国大使

元 NEANET 会長

花田 磨公

2. モンゴル関係事務とモンゴル語研究

1963年の4月、外務省に初出勤すると、私の机には、「ウネン（真理）」、「フドゥルムル（労働）」、「オトガゾヒオル（文学）」、「蒙古消息」（中国語）など数紙、「ナミン・アミドラル（党生活）」、「トンショール（きつつき）」、「ツォグ（灯火）」、「ソブレメンナヤ・モンゴリヤ（現代モンゴル）」（露語）など数誌のほか、統計集など20冊ほどのモンゴル発行の書籍がつまれていましたので、2年間のモンゴル語研究員の仕事をお受けすることにしました。これだけでも当時で見れば新聞雑誌書籍のグランドスラムというような感がありました。まさに宝の山でした。

当時の日本における古典モンゴル語の理解力は世界一流であったといっても過言ではなく、恩師小沢重男教授は中世モンゴル語の世界一の権威でした。また、中世モンゴル史、いわゆるチンギス・ハーン帝国の研究には200人もの学者が大学にポストを得ているといわれました。しかし、モンゴル現代史を本格的に研究している人は皆無といえそうでした。恩師坂本是忠教授が事情講義の範囲内で研究されてはおりました。ですから、日本における現代ハルハ・モンゴル語の理解力はターヘル・アナトミア時代の名残をとどめていたと言っても過言ではありません。

外務省での仕事が始まると、大学でのモンゴル語学習と同様、手探りでの読解となり、恩師にきいてもらいがあかないので、自力解決せねばなりません。しかもそれが権威ある役所の解であれば責任重大と感じました。当時役所は無謬との建前でした。文書なくしましたごめんなさいと今簡単に言っていますが、当時はそんなことは許されません。それこそ責任問題でした。したがってこっちも慎重のうえ慎重にノートを何冊かとりながら、森羅万象についてのモンゴル語の定訳を確立するため、努力しつつ、膨大なモンゴル語紙誌の記事を読み進め、重要ニュースの翻訳、調書作成等の仕事を進めました。

仕事のかたわら、同時に精松源一先生の辞書を訂正したり、空白に資料から例文を書き取りながら使用できる意味を確定したり、モンゴル語研究を朝から晩まで帰宅後も同時にしておりました。まさに「ひとり杉田玄白」状態でした。同級生から辞書をもらい受け、2冊の辞書の空白は例文で埋まってしまいました。数をこなして複数回見た単語の意味を辞書の前後を読み、その細かい使用例をから意味を確定していきました。現代モンゴル語に普通にでてくる -aashtai, -uushtai なる語形を発見し、恩師に報告したら、君が論文にして出すようとのことでしたが、例文をたくさん収集して、ノートごと差し上げ、私は言語学者ではないので、先生が学生の教育にお役立てくださいと申しあげました。私にはああしたい、こうしたいはありませんでした。このように膨大なモンゴル

記事を読み進めている人は、日本広しといえど自分だけ、自分の知識が日本の現代モンゴル・クウォリティだとうぬぼれてはげんでいました。

モンゴル語研究を執務時間中にするなどいまは考えられませんが、当時外交関係もなく、戦後海外へのびた手足をもぎられた外務省、特にアジア局は、現地情勢を公開情報など情報収集して分析して調書など作成しておりました。

そんな中で、ウネン紙報道から主として採用した資料を使用して、小冊子の調書『モンゴルの選挙制度』（この冊子は政治的に利用され、他大学の方の著書として、同氏の著作目録に掲載されているのを後に発見しました）、モンゴル人民大会議幹部会議長（いわば元首）だったサンボー氏の『モンゴルのラマ教（真言宗系チベット仏教）』の翻訳を完成し調書本として印刷されました。ラマ教の本はチベット仏教の権威京大の佐藤長教授より二箇所誤訳を指摘されましたが、私の暴挙にお褒めのお言葉もいただきました。誤訳については赤面するばかりで、お褒めの言葉はさほどうれしく感じませんでした。学者の友人から、あの先生に褒められお前すごいじゃないかといわれましたが、誤訳のほうに今でもこだわりを残しています。年度末には、各月のモンゴル月報の記事を倍に増量して再編集して、331頁の『モンゴル年報1963』を発行しました。

最後にモンゴル文字にふれたいと思います。

モンゴル語はその言語を表記するため、主なものでも歴史上10種類以上の文字が使用されましたが、もっとも普及したのは左から縦に表記するウィグル文字で、この文字は今も中国内蒙古自治区では使用されています。もちろんモンゴルでも一部使用されていて、1990年民主化以後、急速なナショナリズムに後押しされて、全面的に移行することが検討されました。

そうなるわが国のモンゴルに対する経済協力にも影響しますので、1991年11月当時モンゴルデスクをしていた私は、現地に出張し、モンゴル語表記の移事情形を調査研究しました。関係部門の聞き取り、関係者との議論、資料収集、教育現場の調査などを敢行し、やや分厚い調査報告書を外務省に提出しました。単年度会計をやっている日本の対外経済協力で、相手国の会計専門家が突然大量に不足する状況が見えてきて驚きました。縦文字では計算ができないということはありませんが、やり方は困難で、日本で突然江戸時代の和算になったよりもひどい状況が予想されました。言語が外交に影響があった少ない事例の一つでした。

東京外国語大学ではいち早くモンゴル人民共和国（現モンゴル）で採用されているハルハ・モンゴル語をロシア文字33文字に2文字を追加したいわゆる新文字（キリル文字使用）で教え始めていました。しかし、テキストとなる新文字表記のモンゴル語書籍がアルファベット学習本を加えても日本で数冊しかないとささやかれていた中での学習でした（大学1年のときモンゴル語学者大会がウランバートルであり、先生方が出席して、書籍を若干入手されて帰国され、その後のカリキュラムに生かしてくださいました）。

大学一年のとき原水禁の代表が訪日したというので、上級生にさそわれ、3人で下駄履きで街路を駆けて、大きな音をたててホテルを訪ねました。正面からの入館を拒絶され、代表団の通訳のガルサンジャブさん（後にウランバートルに赴任したとき外国貿易省に務める同氏と懇意に交際させ

ていただきました。) がわきから招き入れてくださり、「なんか飲むか、ジュース？」と流ちょうな日本語で学生をあしらって下さいました。そのとき、普段不明な単語の語彙を確かめることもしました。上級生はモンゴル語で話していました。初めてモンゴルの方にお会いし、学習しているモンゴル語が生きた言語として交わされる場面に接して私は興奮しました。

(2019/8/2)